〈巻頭言〉

自己価値感を育てる園生活の創造

河野　重男

今日の幼稚園にとっての最大の課題は、幼稚園教育要領が主張しているように、「環境を通して行われる教育」によって、教師が「幼児との信頼関係を十分に築く」ことであろう。そのためには、一人一人の子どもに自己価値感を持たせることがだいじである。

グラッサーというアメリカの精神分析の研究者が『落伍者のない学校』（一九六九年）という本を書いている。今日のわが国の問題意識でいえば「落ちこぼれ、落ちこぼしのない学校」ということになろうか。そうした落伍者のない学校を実現していく上で、決定的にだいじなことは、「一人一人の子どもに自己価値感を持たせる」ことだ、というのが彼の主張である。

彼のいう自己価値感は、よくいわれる承認の欲求、あるいは自己存在感といってもよいものである。幼児期の段階、小学生の段階、中学生の段階、それぞれの段階を通して共通にいえることだと思うが、自分は自分なりに個性的ななにかを持っている。よくいわれる「ピカリと光るなにものか」ということに当たろうか。そうした個性的存在としての自分の存在は、そのことを通して親にとっても意味のある存在だし、仲間にとっても、また教師にとっても意味のある存在だ、ということの実感である。勉強ができるとか、頭がいいとか、そうした一本の物差しではなくて、その子なりに持っている個性的

なにものかを通して、親にとっても意味のある存在だということを実感させる。仲間たちも、その子なりに持っている個性的なものを評価しながら、それによって集団に寄与し、貢献しているという存在感を実感させる。とりわけ教師にとっても「ああ君もこの園の一員として」ということを実感させる。こうした意味での自己価値感を一人一人の子どもに持たせることが落伍者のない学校にしていくうえで決定的にだいじだ、というのである。

どの子にもその子なりの自己価値感を持たせるためには、健康な教育環境の創造ということがだいじな視点になる。このことに関しては、ビュッチャーが健康的な学校生活の視点として挙げていることが、指標としてよい参考になる。

もともと、この健康の概念は、W・H・O（世界保健機構）の定義のように「単に病気が存在しないだけでなく、身体的、精神的ならびに社会的に十分に良好な状態にあること」をいう広い積極的なとらえ方である。ビュッチャーは、このような意味での健康的な学校生活の内容として、物的環境が健康的であることとならんで「精神的、情緒的、社会的環境」の健康性を挙げ、その内容として次の五項目を挙げている。

○日課の健康的配置（生活のリズム）
○生徒と教師、生徒相互のよい人間関係
○個人差の尊重（個性の尊重）
○健康な管理的慣行（自己管理の習慣形成）
○あそび、レクリエーションのための十分な時間

以上にみてきたような意味で、これからの幼稚園教育の在り方を「一人一人の子どもに自己価値感を育てる園生活の創造」という視点に立ってとらえていきたいものである。

（お茶の水女子大学名誉教授）